

〈氣候と信仰と持病と〉から見る「皇民文学者」 周金波研究の可能性

唐 瓊 瑜

始めに

本日、この発表の機会を与えて下さったこと、本当に心から感謝します。実は九七年に私が初めて口頭発表をしたのは此の研究集会でした。今日再び発表のチャンスを恵まれて、大変うれしく思っています。周金波に関する研究、近年再評価する動きが確かにありますが、決して満足出来るレベルに達したとは言い難い部分も否定出来ません。そこから今日は私にとっての難問を提起する形で発表を進みたいと考えています。不備な点がたくさんあると思いますが、何かの助言がいただければ、と思います。

それでは発表に入らせて戴きます。

まずこの発表で論じる〈氣候と信仰と持病と〉という作品は、馴染まない方が多いかも知れませんので、念のためにご添付致します。そして、「皇民文学者」として知られている作者の周金波については、お手元にある資料の①を参考にして下さい。

〈氣候と信仰と持病と〉此の作品は、周金波の第五作であり、昭和十八年一月の《台湾時報》という雑誌に発表されたものです。その簡単な大筋は資料①のEにあります。

一、

この作品を理解するには、先ず〈氣候と信仰と持病と〉此の作品から台湾・

日本文化上に何の違いが見られたか、を考える前に、国家神道、どうして台湾に国家神道が根付かれなかったかを考えてみたいです。そして庶民レベルで論じて見たいと思います。

実は、台湾は日本の領土になってから、間もなく日本の各宗教は続々台湾に入って布教活動が展開されました。現に今でも教派神道の天理教、金光教の教徒が台湾にいます。資料②のAを見れば分かるように、台湾の人々は同時にいろいろな神様を信仰していますので、其の中に日本の神様を加えても何の不思議でも無いはずです。日本の仏教系でも基督教系でもある程度教徒が集まりました。なのに、神道はなかなか受け入れられませんでした。ここは昭和十六（一九四一）年年末までの神道各派の信徒数がありまして、内訳の台湾人の部分だけ見れば、全台湾信徒の一八〇二〇人の中、天理教教徒が一番多く、一三一一人を占めましたのに対して神道の信徒が〇人でした。というのは、戦争末期、〈氣候と信仰と持病と〉此の作品が書かれた時期に、強力的な国家信仰を強要する側とあくまでも個人信仰を求める側との衝突のみならず、神道、そのものは台湾の風土にどうしても調和出来ない要素があると考えべきだと思います。

其の一つは、資料②Bの図（１）と図（２）に隠しています。図（１）と図（２）は当時一般家庭の平面図です。多少作品の参考になると思います。

図面を見れば、神道を信仰すると、神棚は大きな問題になります。問題を解決するため、後ほど「正廳改善運動」を起こした訳です。その結果、資料②のCのような理不尽な状況を生み出されました。作品の中にも似た記述がありました。先ほどの図面からも分かるように「廳」、即ち台湾家屋において、客間、仏間、食堂の機能を揃えた一番大切な場所は、破壊されることになります。本来祀った神像、先祖の位牌はもちろんのこと、神棚そのものも不評を買います。神道の中に良く使われる品々は例えば、神宮の大麻、神符とか、神社なら玉串など、色合いが白色が多く、何となく不吉に連想されます。

そしてもう一つ、供え物。神道に許される供え物は、恐らく台湾人にとって余りにも質素すぎて物足りないと感じるでしょう。特に、肉類の使用禁止は一

般台湾人なら納得出来ないでしょう。資料②のAの部分をもう一度見て戴きたいです。台湾人が考えている神々の世界は、人間界と極めて似ている部分があります。皇帝みたい全てを評価する神様がいて、其の下に民を管理監視する官僚のような神様がいます。全てを見られ、評価される民にとって、供え物は自分自身の真心をアピールする絶好の道具です。評価に繋がれば、幸せに繋がる。言い換えれば、即ちご利益になります。だからこそ出来る限りのおもてなしを惜しまずにする習慣は今も残っています。

まして穢れが嫌われて葬儀も関与しないというのは、恐らく当時ではなくても現在の台湾人に理解を求めても無理でしょう。

少なくとも以上のような要素が潜んでいれば、そもそも神道の普及がかなり難しいと考えられます。一九三六年年末以降、強制的に神宮の大麻を各家庭内に祀るようにさせられて、一年後、「正廳改善運動」が始まりました。

以上述べたのを背景にして、神道信仰から所謂「迷信」の台湾伝統信仰への回帰をテーマとしたこの作品は、明かに周金波の出世作〈水蝨〉(資料①のA)、〈志願兵〉(資料①のB)と違って、激しい日本化の色が褪せました。と云うのを理解出来るはずです。主人公の「持病」(足の神経痛)が雨の多い台湾北部の「氣候」に敵わないように、主人公が自分の「持病」を信仰心で直してくれると期待した日本の神道は、結局台湾民間信仰の背後にある文化・価値観を越えることが出来ませんでした。主人公の葛藤は、妻の台湾民間信仰活動の中に一つ一つ織り込まれ、台湾・日本の狭間にその心が揺れたことを克明に描かれました。

昭和十七年頃、丁度周金波は大学から出て台湾に戻ってから凡そ一年経ちました頃から、此の作品が書かれた深秋までに、台湾の風習に関する二つのエッセイを発表しました。其の延長線に〈氣候と信仰と持病と〉此の作品があると言えるかも知れません。細かいことは今日は触れませんが、此の作品の最大の特徴と云えば、回りの理不尽に理解を示したことです。今まで作品の多くは社会現象・問題の解決策を性急に打ち出しました。これは作家周金波の観察眼の変化とも言えましょう。

二、

この作品は台湾・日本文化の衝突を露呈したもののみならず、作家周金波の従来の評価における限界を示す要でもあります。というのは、「皇民文学者」とされた周金波に対しての批判が多いからです。批判が多い割に概念的なものが多いです。まず「皇民文学」に関する代表的論述は資料の③を参考して下さい。此のような見解は、中国の方の研究者にも大差がありません。そこから読み取れるものは何かというと、戦争期の作品に対する評価の基準の一つは「抵抗」であります。即ち抵抗の痕跡が見られないと、評価に与えません。まして賛同者なら問題外です。これは明らかに現在のイデオロギーで「過去」を図ります。簡単に言えば、今の「正しさ」を「過去」に求めます。今の「正しさ」から戦前の間違った「悪」を裁く訳です。然し、今の「正しい認識」というのはいつまで「正しい」なのか、誰が言い切れるのでしょうか。

もし、文学は社会のある部分を反映するものであれば、抵抗しなかった其の当時の現実、譬えほんの少数の人の考え、もしくは現象であっても、それを表現してはいけなんでしょうか。これは当時の少数の一部を排除して、歴史の流れの中に封印することになりませんか。それとも歴史・文学は本来多数派だけのものでしょうか。まして「正しい認識」というのは殆ど主流となった政権の政治的意図と切り離しにくいものです。ならば、文学者となった条件の一つは「現在」だけではなく「未来」への「正しい」予知力を備えなければならないことになります。

このように一定のイデオロギーによって周金波の作品は否定されてきました。が、意外にも論じられたのは殆ど処女作〈水癌〉と二作目の出世作〈志願兵〉に集中し、その題材から必然的に批判的となりました。なら、周金波論というのはどんなものでしょう。代表的論述は資料④を参考して下さい。資料④のAの部分を特に注目して載せたいと考えております。この葉石濤は云わば台湾研究の大家と云われるほどの人物であります。実際周金波その人・作品が、否

定的な見方で固められたのは、資料④のAの(1)と(2)の影響が大きいです。何故なら、一九九三年に台湾の雑誌に初めて周金波の特集を組んで、〈水癌〉と〈「ものさし」の誕生〉との中国語訳文が出る前、恐らく殆どの人間は周金波の作品に触れることも無いまま先入観だけを持つようになっていました。その後依然として殆どの作品は翻訳されていません。もちろん研究もされていません。しかし、資料④の順番に沿って読んで見れば、葉石濤の発言はまさしく「正しい認識」に沿ったものであります。其の背景に台湾の民主化と政権交代があります。そして日本人研究者の影響があります。更に、最近のインタビューの中、今まで大変評価された作家は今度だめだという過激な発言をして、其の原因は大中国主義者だからと云う。

此のようにイデオロギーだけで評価するのは決して台湾の研究者のみではありません。《中国文芸研究会会報》一八〇号には『周金波氏のプレゼント』という文章がありました。周金波の死を知ってから書かれたものです。周金波が講演のときの発言に対しての不満を述べています。要するに、周金波が「一言も口にしなかったのは、日本の行った侵略戦争の全体的意味、加えて中国をはじめとするアジア諸国の膨大な犠牲者のことである」。即ち、「周氏の中に怒りや罪の意識があれば、それを足場として日本軍国主義を批判ができ」るわけです。なるほど、戦前台湾人に政策の同調を求めたのも日本人ですし、戦後台湾人に政策の批判を求めるのも、やっぱり日本人です。日本人って本当に恵まれた立場にあります。これはもしかしたら永遠に「正しい」側にいる人間の強みかも知れません。

作品をイデオロギーだけで評価する場合、必然的に同じ尺度で、歴史の流れから一律に作品を検討するようになります。すると、作家個人の要素を無視するような傾向が見られます。周金波に限って云えば、それは、作家として成長する周金波の、その観察眼・心境の変化などを完全に無視されたことがその背景にある、と考えられます。更に言えば、旧植民地文学を評価する場合、研究者側は未だに「統治者側に抵抗するなら善し、賛同するなら悪し」のような明

確した二分法で判断する傾向があります。結局、其の同調した度合いを探って、周金波を否定したり、擁護したりすることになる訳です。此の九〇年代に入ってから同情的評価、擁護するような、資料④のBCDのように新しい観点でもっと周金波の作品を広げて見る動きは、即ち周金波の再評価と云われる新しい流れです。いずれにしても作品に戻って作品を中心にして、全体の分析、特に構造上の分析が未だ未だ欠如していると思われます。

そこから、文学研究の矛盾に滲み出すものがあると思われます。そして其の矛盾こそ周金波研究の道しるべだと信じたいです。

限られた時間内で出来るだけ分かりやすく述べたかったですが、随分省略して乱暴になっています。今日の発表はこれで終了させて戴きます、ご静聴ありがとうございます。

参考資料

①周金波について

一九二〇年生まれ。生まれてから間もなく日本に連れてこられた。一九二三年に関東大地震のため、帰台した。一九三三年四月に日本大学付属第三中学に編入した。一九四一年三月に日本大学歯科専門部を卒業した後、帰台した。一九九六年に死去。

作品の執筆期間は昭和十六年から昭和十九年（一九四一～四四年、二〇歳～二四歳）の間、僅か４年間程で、その発表の舞台は《文藝臺灣》を主にした。発表された（現存）小説の数、僅か七作品しか無い。其の粗筋は以下の通りである。

A、〈水癌〉：処女作 帰台前の作品

粗筋は次の通りである。

齒医者 of 彼は「島民は教化し得るのだ。それも豫想以上に容易に速かに出来得るのだ」という信念を抱きながら、熱心に皇民鍊成運動、迷信陋習の廃除などを提唱した。その彼がある日、ある母娘と出会った。末期水癌にかかった娘

を早く大学病院へ連れて行くように彼が母親を説得したにもかかわらず、病院へ行かせず、結局娘が死に至ったのである。娘が死んで間もなく、相変わらず賭博に耽る母親は巡査に捕まってしまい、これらの過程を目撃した彼が台湾の真の現状（落後の程度）に圧倒されて、それに抵抗しようという心境に至った。（一九四一年三月《文藝臺灣》第二卷第一号に発表）

B、〈志願兵〉：「皇民文学」とされた代表作

粗筋は次の通りである。

私は三年ぶりに帰台する義弟の張明貴を迎えるため、波止場へ出掛けた。そこで、八年前の学生時代の思い出が蘇って、嘆いた時、同じく張明貴を迎えにきた（張明貴の旧友の）高進六と出会った。その後、この二人の旧友同士は皇民鍊成（如何にして日本人になるか）の方法を激しく議論した。張明貴の文化レベルの向上という意見に対して、高進六は拍手を打つことによって日本人になり得る信念は生まれると主張する。だが、高進六が血書志願したのを知ったとたん、張明貴は自分の無力を全面的に認めた。（一九四一年九月《文藝臺灣》第二卷第六号に発表）

C、〈「ものさし」の誕生〉

この作品は、（台湾人就学の）公学校五年生の主人公呉文雄の一日を中心に、展開して行く。

呉文雄は戦争ごっこをして遊んだ時、常に、（日本人就学の）小学校の児童を意識したり、羨ましがっていた。だが、いざ父親に小学校に編入したらと勧められたら、

「公学校への執着と郷愁」、「小学校への憧憬が様々の空想を喚び醒したあと、不安と杞憂と執着と郷愁がその空想を叩きめしてゆく。」

このように、内心に忸怩たるものがあることと懸命に奮戦した心境を描写した。（一九四二年一月《文藝臺灣》第三卷第四号に発表）

D、〈ファンの手紙〉

改姓名運動を背景にしたこの作品はK先生のファンの「わたくし」がK先生

に出した九通の手紙を通して、台湾青年が日本名に名乗るまでの葛藤を語った。

「わたくし」が改姓名に踏み切る理由は、仕事上の挫折と上司から受けた差別待遇のつらい経験を、すべて自分自身が日本人になりきれていないからだという気持ちからである。もっといい人生を送るために、改姓名しかないという考えを描いた。(一九四二年九月《文藝臺灣》第四卷第六号に発表)

E、〈氣候と信仰と持病と〉

神道信仰をテーマにしたこの作品には、主人公の蔡大禮は神道への信仰のために、周囲の環境や人々と融和できなくなった。

蔡大禮の信仰の底には、伝統的な信仰に対する下心—何か得られるとか、自分の夢をかなえてくれるとか—が見え隠れしている。そこで、蔡大禮は真剣に信仰してきた神道が自分の持病を直してくれない空しさと、その信仰に対する動揺した心の情けなさに苦しんだ末、台湾宗教の信仰象徴の「観音菩薩」に戻る、という経緯が書かれた。(一九四三年一月《台湾時報》に発表)

F、〈郷愁〉

粗筋は次の通りである。

東京から台湾に帰って来た主人公の「私」は、いつも無意識的に台湾と東京を比べている。「私」の目には、台湾の不条理が写り、台湾のためと思って、いろいろ計画を立てても、周囲の人々に受け入れられず、寧ろある敵意の冷たい目で見られている。「私」は、孤独感をしみじみ感じて、回りに関する無力感に溢れた毎日を送って、不安の境地に落ちている。(一九四三年四月《文藝臺灣》第五卷第六号に発表)

G、〈助教〉

総督府情報課の依頼作品であり、現存の最長作品でもある。

主人公の蓮本弘隆は国民道場の元修練生で、教官を補佐する助教として国民道場に舞い戻った。戦時下にある訓練の風景を描きながら、修練生たちとの係わりの中、蓮本弘隆の内心にある不安定感をよく表現した。と同時に国語不解者（日本語の理解不能者）の修練生を描写することによって、兵隊を多く送り

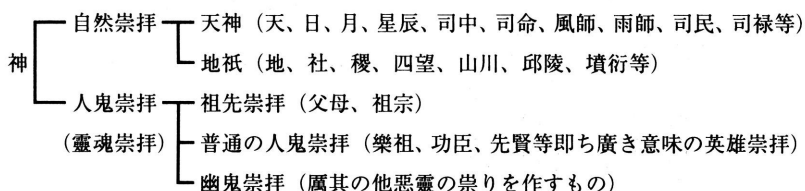
出したい統治者側の思惑の矛盾を目立たせた。(一九四四年九月《台湾時報》に発表)

②信仰心／家屋建築

A、台湾の信仰について

《台湾島民の民族心理学的研究》によれば、

神々の本質によりて大要左の如く分類せられる。



然るに支那民族の信仰の中心は「天」である所から是等の天神、地祇、人鬼に屬する總ての神々は、其の「天」の觀念の神化された玉皇上帝（俗に天公と呼ぶ）の統制の下に各々神務を授けられ一つの帝政的多神教を形成して居る。ところが、天神地祇はもとから自然に神格を得て居るから別に新しく上帝の勅封も必要でないが、人鬼に於いては生前の善行、靈能等特に秀ひでた人が神と為り得るので、人鬼は一度必ず昇天して玉皇上帝に謁し其の勅封を受けねば神格を得られぬのを原則とする。

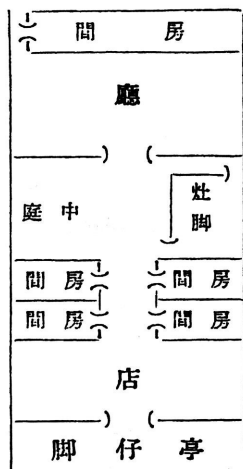
（前掲書；柴田廉 一三九～一四〇頁 一九二三年二月發行 南天書局 一九九六年八月復刻版）

それぞれの神々は、人間界の民を監視してその日常行為の善惡を、神々の頂点に立つ玉皇上帝に年一回の報告義務がある。それに基づいた玉皇上帝の判決は、人間の吉凶禍福が決められる。これは台湾人の善惡觀を深く影響したと考えられる。

〈氣候と信仰と持病と〉の中、度々触れた「媽祖」（「天上聖母」もしくは「天后」とも呼ぶ）は実在人物だったので人鬼に属する神である。航海の女神だ。

B、台湾の住居について

図1 市街地家屋平面図（《台湾習俗》；四五頁）



説明の部分は引用者による添付。

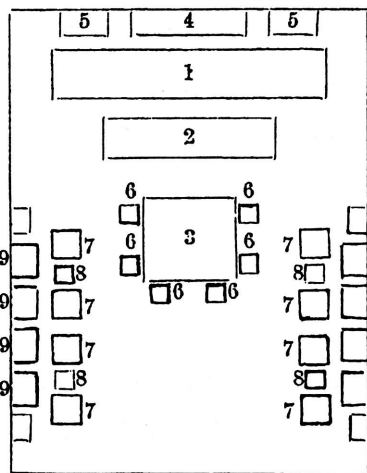
説明：

廳：図2から見て分かるように客間・仏間・食堂の機能を兼備。

灶脚：台所

亭仔脚：一階にある外に突き出す溶形の公衆用歩道通路

図2 廳内部平面図（《台湾習俗》；六四頁）



（ ）内は引用者による添付。

1 神明卓（奥の祭壇、神仏の像・祖先の位牌を安置）

2 中案卓（祭祀用の香炉・燭台・花瓶・供物を安置。飾り台でもある）

3 八仙卓（八人掛けのテーブル。普段は食卓、祭祀の時供物を安置。）

4 神像掛軸

5 聯（文字を書いた一對の掛け軸）

6 椅子

7 筴椅

8 茶机

9 丹條聯（書画の軸物）

C、

正廳改善運動の当時、《台湾習俗》には以下の現状を述べた。

支那事變發生後臺灣人の皇民化が高唱され、生活の各部面に相當な改變が行はれた結果、此客間の神卓上に從來祀られて居た神佛の像や祖先の位牌は他に移されて其處には神棚が飾られ大麻を奉齋し、神卓の後の聯も國民精神を高揚する和歌などに替へられ、以前の香爐・燭臺に代るに櫛立てが置かれる様になつた、ところが此の様な大變革は臺灣人の自發に出たものでないだけに、容易に親しみが出ないらしく、大麻奉齋の神棚にはほこりが積り、捧げた櫛が枯れて焚附に程良い様なのを見受けることは決して稀ではない。

（《台湾習俗》；六二頁）

③「皇民文学」についての論説

例として以下の論説を挙げる。

A、

《日據時期臺灣小説研究》 許俊雅 文史哲出版社 一九九五年二月

- (1)「(訳) 台湾総督府の籠絡政策・同化主義及び皇民化運動の影響の元で、台湾新文学作者の中にある人は「自発的且つ無意識的に」皇民化鼓吹の道に走って、転落して植民政策を賛同し協力するような迎合者となった。(以下略)」(一一〇頁)
- (2)「(訳) 当時の台湾作者は、中途やめたり、上辺ばかり合わせたりしていた。大体に云えばその知識人としての良心が完全に失われたほどのことにはならない。其の他、ある「自発的且つ無意識的な」青年作家は奴隷化された結果、台湾人としての民族意識が失われて、とうとう皇民の作品が産まれた。(以下略)…」(一一二頁)

(3)「(訳) 戦時下の台湾文学を研究する際、最大の問題点は、台湾作家が本心から皇民化政策に共鳴したか否か、にある。(以下略) …」(四七六頁)

B、

《日據時期臺灣新文學運動研究》 梁明雄 文史哲出版社 一九九六年二月

(1)「(訳) 占領時代の末期、所謂「皇民文学」というのは、作家が強力なファシズムの力により虐げられた状況の下で、精神面が現実の環境におされた結果、屈従、傾斜せざるを得なくなり、表面的に、日本の植民統治及びその侵略戦争を認めた妥協的な「時局文学」である。それは時代の産物であり、日本帝国が高圧統治した、必然の結果であって(以下略) …」(二七八頁)

(2)「(訳) 占領時代の末期における皇民文学は、戦時中、滔々たる皇民化運動の浪が巻き起こったとき、立場が確立していない少数の作家を、日本植民当局が脅したり、利で誘ったりすることによって屈従させ、侵略戦争を謳歌した文字を書かせたものである。しかし、こういう屈従した、逼迫した標語的文学と言うのは、其の文学的価値が結局限られていて、(以下略) …」(二八六頁)

④周金波についての論評

A、葉石濤の評論を例として挙げてみよう。

(1)『「文藝臺灣」及其周圍』《文學回憶錄》 遠景出版事業公司 一九八三年四月

「疑う余地もなく正真正銘の皇民化文学である」。(一六頁)

(2)『第二章 台湾新文学的開展』《台灣文学史綱》 文学界雜誌社

一九八七年二月初版 一九九一年九月 二版

「戦争の暗黒の深まりと共に、皇民化運動の波はますます高まっていった。そうした中で、植民地政府の政策と考えを同じくして、親日路線に走る作家もいた。例えば、周金波の「志願兵」(文藝臺灣 一九四一)「水癌」(文藝臺灣 一九四〇)などである。」(六十六頁)

(3)『四十年代的台灣日本文學』《台灣文學的悲情》 派色文化出版社

一九九〇年一月

①「…「志願兵」は高進六という台湾青年が高峰進六に改名し、さらに、血書志願で志願兵になった経緯を描写した。日本人の奴隸化政策が一部の無知の青年の間に効果として現れたという現実をこの作品で証明した。周金波は第二回「大東亜文学者大会」に出席したことがあった。周金波の小説で日本の五十年間の植民地統治により、如何に一部分の台湾人の民族意識が摧破させられたかを、そして奴隸化が成功したという事実を明らかに示した。これも悲惨な歴史の記録になるといえるであろう。」(五十三～五十四頁)

②「…周金波が書いた「志願兵」は確かに皇民文学的傾向が強かった。だが、この作家は光復以降創作したことがないし、文壇からも外れた。当時あの環境の下で、何であんな作品を書いたか。本当に自分が日本人と同じものだと思えて、さらに迎合したかどうかについては、本人が説明する気がない限り、どんな攻撃をしたとしても、不平且つ無聊のことになる！」(一二七頁)

(4)『私の台湾文学六〇年』《新潮》 新潮社 二〇〇二年九月

「…この皇民文学が戦後問題になったのは、中国人意識を持っている台湾の作家が皇民作家を攻撃したからです。皇民作家は「日本奴才」、日本人の奴隷だと侮辱したのです。この皇民化というのは台湾人を日本人化する意図があったのは間違いない。ところが総督府から出たこの皇民化の中的一条一条を検討すると、それは台湾の現代化、近代化を促進するような有効な方法であったともいえます。それで周金波（以下の経歴紹介を省略）先生は皇民化、つまり日本人に学ぶということは日本のように台湾が近代化する意味であるとして、皇民化に賛成しました。周金波先生は決して日本の奴隷になるつもりではなかったんだ。『志願兵』などを書いたのは、台湾人が日本人に学んで近代化するという意図だったと思います。

この皇民化の問題は今でも重大な問題になっています。台湾人の立場からと中国人の立場から、日本人の立場からとでは意見も違います。非常にややこしい問題です。まだ十分に研究された訳ではありません。将来はこの皇民文学に

関して各国の作家が集まって議論を聞くのは台湾人にとってもためになると思います。」(二七一頁)

これらの評論見ると、微妙に変化していることが分かる。その変化が皇民文学の再評価の風潮と多少関係があると思われるが、そこでも本人の証言がキーワードとなっているようである。

B、

『周金波論』《台湾の日本語文学》 垂水千恵 五柳書院 一九九五年一月
九二年に発表した論文を添削して、収録したものである。主に小説〈水癌〉・〈志願兵〉を中心に論じて、「近代化の過程において人は以下に自己の民族的アイデンティティと折り合いをつけていくか」という観点から初めて周金波の作品を検討し、葉石濤をはじめ台湾文学関係者に影響を与えた重要な論文。

C、

(1)『もう一つの「皇民文学」・周金波——「大東亜共栄圏」の台湾作家 その2——』 星名宏修 野草 第四九号 一九九二年二月

周金波の経歴紹介・作品粗筋の紹介を兼ねて、〈水癌〉・〈志願兵〉・〈「ものさし」の誕生〉・〈郷愁〉の四作品を検討したものである。そして以下のような結論づけた。

「皇民」への希求は以前のままであるが、「亜日本人」としての「本島人」から脱出することの困難さの自覚に加えて、周囲の「本島人」とも異質な自己を発見することになる。彼の残されたのは出口なしの逼塞感である。

(2)『〈氣候と信仰と持病と〉論——周金波の台湾文化観』《よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品》 星名宏修 東方書店 一九九五年一〇月

「この土地」台湾に対する周金波のこだわりを力説した論文である。そして「このこだわりには、台湾独自の文化に対する愛着が込められており、その限

りでは総督府の推し進める「皇民化」運動と、齟齬をきたす可能性が残されていたことを見落とすわけにはいかない。」という観点に立ち、新しい周金波像の発見が可能となった。

D、

『周金波新論』 《台湾文学の諸相》 中島利郎 緑蔭書房 一九九八年九月

〈水滸〉・〈志願兵〉・〈「ものさし」の誕生〉・〈氣候と信仰と持病と〉・〈郷愁〉この五つの主な小説を通じて、「〔愛郷土、愛台湾作家〕としての周金波像を立証したい」という前提で書かれたものである。

* 討議要旨

坪井秀人氏は、台湾における日本の宗教政策については、台湾神社を創建し、北白川宮を祀る、という大きな枠組みがあるが、この発表は、家庭内の祭祀のあり方をふまえている点が重要であり、神道が根付かなかった理由がよくわかる、と述べ、発表者も、そういう視点で考えるのが大事である、と述べた。

大黒貞明氏は、台湾の宗教に五行思想の影響はないのか、と尋ね、発表者は、もちろんあるが、台湾の信仰は神を人間に近づけるのが特徴である、と答えた。

李文茹氏は、媽祖は実在の人物だったというのが本当か、と尋ね、発表者は、福建生まれの林默娘という人だといわれている、と答えた。また、皇民文学の定義について尋ね、発表者は、この言葉は曖昧のまま使われている、広く言えば、占領期に書かれたものはすべて皇民文学だが、特に「皇民化運動」に則って「天皇の赤子」化を表現したものは「皇民化文学」と呼んだ方がいい、と答えた。